

とりたて詞の区分をめぐって

茂木 俊伸

0. はじめに

とりたて詞¹や副助詞・係助詞の分析では、これらのカテゴリーの語と格助詞、あるいはそれらの語相互の承接のあり方が一つの問題とされてきた。

例えば、近藤(1983)は、このような承接関係を含む基準により、とりたて詞相当の語群のうち「だけ」「ばかり」等を「準体機能」と「副機能」を持つ「混合型」副助詞に、その他の語を副機能のみを持つ「連用型」副助詞に分類している。また、宮地(1999)も、同様の観点から、とりたて詞を<文とりたて>と<名詞句とりたて>の機能を持つ「だけ」「ばかり」等と、<文とりたて>の機能を持つ「も」「しか」等に分けている。次の(1)は、宮地(1999:62)の分類(表3)を一部抜粋したものである。

(1) a. 「だけ」「のみ」「ばかり」(Ⅱ類)

構文的特徴：格助詞に前接、格助詞に後接+他の副助詞(類)に前接

b. 「は(対比)」「しか」「も」(Ⅲ類)

構文的特徴：格助詞に後接+他の副助詞(類)に後接、形容詞連用形に後接

しかし、既に沼田(1986)や寺村(1991)等で指摘されているように、このような承接順は、現代日本語の場合、例えば、「さえ」は(1b)のタイプに近い特

¹ 「とりたて詞」とは、伝統的に「副助詞」「係助詞」に分類されてきた語群の一部を、一定の意味・統語的特徴を共有するものとしてカテゴリー化したものである。以下、本稿では、沼田(1986)及び沼田(2000)が提示する4つの構文的特徴を持つ語を分析対象とし、その総称として「とりたて詞」という用語を用いる。

徴を持つが、格助詞に前接(例:「さえが」)及び他の副助詞(類)に前接(例:「さえも」)し、「まで」は(1a)のタイプに近い特徴を持つが、格助詞に前接しにくい場合がある(例:「?までで」)というように、現象としてはさまざまな「ゆれ」を伴うため、とりたて詞を厳密に二分する基準とはならない²。

一定の文法的特徴に基づいて一つのカテゴリーとしてまとめられる個々のとりたて詞は、一方でそれぞれに固有の、あるいはいくつかのとりたて詞に共通する特徴を持っている。(1)のような承接のあり方はこのような特徴を捉える一つの指標であると言えるが、本稿では、現代日本語のとりたて詞の間に見られる振る舞いの異なりについて、この承接関係以外の現象を中心に検討する。

ただし、本稿の目的はとりたて詞の分類自体にはない。以下では、当該の現象における振る舞いの差に基づき、とりたて詞のグループ分けをする(カテゴリーとしての「とりたて詞」内に区分を設ける)が、本稿の狙いは、その区分が持つ品詞論的な意義を論ずることではなく、むしろその現象から明らかになる、カテゴリー「とりたて詞」に含まれる要素(の一部)が共有する特徴を記述することにある。

以下、第1節では、とりたて詞と数量詞とに共通する分析上の問題を概観しながら、いくつかの現象の観察に基づいたとりたて詞の区分を示す。第2節では、この区分の持つ意味を、とりたて詞の「階層」に関する議論と関連付けながら検討する。

1. とりたて詞の構文的特徴と区分

まず、分析の手順として、格助詞との承接順に基づいたとりたて詞の区分をしておく³。ここでは(1)に挙げられたとりたて詞を具体的な分析の範囲と

² 近藤(1995)や宮地(1999)は、現代語におけるこのような問題を認めつつ、通時論的な視点を考慮した上で、(1)のような構文的特徴に基づいたとりたて詞(副助詞・係助詞)の多属性の議論を行っている。

³ 本稿では、構文的特徴に対応して想定されるとりたて詞の意味機能的側面に関しては具体的な分析を行わない。確かに、とりたて詞の構文的特徴と意味機能は何らかの形で相関

し、(従来の副助詞・係助詞の区別に合わせて)「だけ」「ばかり」を「Fタイプ」のとりたて詞、「は」「も」「しか」を「Kタイプ」のとりたて詞と呼ぶ⁴。承接順にゆれのある「まで」「さえ」については適宜言及する。

1.1 数量詞との共通性

とりたて詞と格助詞の承接順に関するこれまでの議論では、格助詞の前後という分布位置と、その位置の要素によって担われる意味機能との対応が問題となってきた。森重(1954)は、副助詞と数量詞とが同様の分布を示すことを指摘しているが、格助詞の前に分布する要素が名詞句側に作用して全体で名詞的要素を形成する名詞性(準体機能)を持ち、格助詞の後に分布する要素が述語側に作用する副詞性(副機能)を持つという対応を考えるならば、格助詞の前後に分布するとりたて詞と数量詞は、名詞性と副詞性の両方の性質を併せ持つということになる⁵。

これらの要素のこの二面性に対してはこれまでさまざまな議論がなされているが、以下では、共通した問題を抱える数量詞に関する現象を参考にしながら、とりたて詞の区分とその名詞性の問題について見ていく。

1.1.1 不定名詞句との共起

Aoyagi(1994)は、いわゆる遊離数量詞と同様の形で、「名詞句+とりたて詞」の形で構成される句(以下、「とりたて詞句」と呼ぶ)が不定名詞句と共起することを指摘している⁶。このとき両者は、(2)のように、先行する不定

しており、それが例えば安部(1996)や佐野(1997)の「だけ」のスコープ解釈に関わる現象のような形で現れるものと考えられるが、この問題の検討にはさらに多くの現象の記述を要するため、問題の指摘に止めておく。

⁴ 「のみ」については、文体的特徴を考慮してここでは扱わない。また、ここでの「は」は、特に注記しないかぎりいわゆる「対比」の「は」を指す。

⁵ 副助詞に関する問題については、近藤(1983)を参照。

⁶ とりたて詞の場合、「不定名詞句-とりたて詞句」という語順にほぼ固定され、この点で語順の逆転を許す数量詞と異なる。ただし、Aoyagi(1994)が否定対極表現(NPI)を遊離数量詞のタイプとしているように、「しか」についてはこのような語順の制限がない(cf. 江口(2000))。また、本稿では考察していない「こそ」「くらい」等のとりたて詞はこの位置に現れないが、これは後述のとりたて詞の「階層」とも関係する現象であると思われる。

名詞句(例:「学生」「果物」)が上位概念(type)を表し、後続の名詞句(例:「ジョン」「そのミカン」)が下位概念(token もしくは下位の type)を表すという関係にある。

- (2) a. 学生がジョンさえ来た。 (Aoyagi(1994:35))
 b. ジョンは果物をそのミカンも食べた。 (同上)
 c. 学生がジョンしか来なかった。 (同:43)

Aoyagi(1994)には F タイプのとりたて詞の例は挙げられていないが、同様の現象が見られる。

- (3) a. 学生が太郎だけ来てくれた。
 b. 学生が1年生ばかり集まった。

この現象は、(とりたてられる)名詞句単独の場合では起こらないことから、とりたて詞が名詞句のこの位置への分布を可能にするとと言える。

1. 1. 2 数量詞における範疇の問題

上の現象がとりたて詞句と遊離数量詞の間の何らかの文法的性質の共通性を示すものと考えた場合、遊離数量詞の分析における問題点と並行的に、例えば、不定名詞句ととりたて詞句は構造的にどのような関係を成すのか、とりたて詞はいかなる範疇の要素であるのかといった点が問題となりうる。

数量詞については既に多くの先行研究で詳しく扱われているが、ここでは次の3つの分布のパターンから問題を確認する。

- (4) a. 3冊の本を買った。 [数量詞(Q)+の+名詞(N)]
 b. 本3冊を買った。 [N+Q+格助詞(C)]
 c. 本を3冊買った。 [N+C+Q (=遊離数量詞)]

いずれの問題についても、具体的な分析は今後の課題となる。

まず、(4a)の「Q の N」は主要部が名詞であることから名詞句(NP)と考えられる。また、(4b)の NQ 部分も、奥津(1969)や神尾(1977)によって名詞句と分析されている。しかし、北原博雄(2001)で論じられているように、(4c)の遊離数量詞句にはさまざまな問題が生じる。遊離数量詞句は、次の(5)のような名詞句との等位接続構造に現れることから名詞句と考えられる場合がある。しかしその一方で、これを単純に名詞句とすると、数量詞を伴わない通常の名詞句(及び(4a,b)のような数量詞が関与する句)と遊離数量詞句とが対照的な振る舞いを見せる(6)のような現象が説明されない。

(5) 彼は[鉛筆を 3本]と[NP 消しゴム]を買ってきた。

(6) a. 連体詞による修飾:

その[鉛筆(*が) 3本]

b. 連体修飾節による修飾:

彼が買ってきた[鉛筆(*を) 3本]

c. 句全体への格付与:

[鉛筆(*を) 3本]が安い

遊離数量詞には名詞句と構成素を成すタイプのもものと、名詞句と構成素を成さない副詞的なものがあるとされる (cf. 神尾(1977), Ishii(1999), 川添(1999)等) が、いずれにせよ、遊離数量詞句と、その一部である遊離数量詞の範疇は一律には決まらないと言える。

1.2 とりたて詞における名詞性の問題

先の(2)-(3)のようにとりたて詞句が遊離数量詞と表面上同じ構造をとりうるということを考えた場合、上の問題は、とりたて詞もまたその範疇を即断できないものであるということを示唆する。

そもそも、とりたて詞は、沼田(1986)が「分布の自由性」として指摘するように、名詞や動詞、副詞といった多様な範疇の要素に後接することから、澤田治美(1993)や佐野(1997), Aoyagi(1999)等では、前の要素の範疇の特性を

そのまま引き継ぐ特徴を持った要素として分析されている⁷。

しかし、とりたて詞句(名詞句+とりたて詞)を単純に名詞句と見た場合、とりたて詞句が、F タイプのとりたて詞に見られる(6c)を除き、とりたて詞を伴わない名詞句と異なる振る舞いを示すことが問題となる。

(5) ??[ビールばかり]と[NP おでん]を注文した。

- (6) a. *その[鉛筆さえ] (cf. [その鉛筆]さえ)
 b. *彼が買ってきた[鉛筆も] (cf. [彼が買ってきた鉛筆]も)
 c. [鉛筆だけ]が安い。

沼田(1986)及び沼田(2000)は、とりたて詞句が連体修飾を受けえないという(6b)のような現象を根拠に、(とりたて詞句の一部である)とりたて詞の「非名詞性」を主張している⁸。実際、(5)(6)の現象を考えると、「だけ」「ばかり」によって形成されるとりたて詞句でさえ、格助詞の前という位置からこれを即名詞句と考えることには問題があると思われる。

このような範疇の問題は、ここで見た現象のみから結論が出せるものではないが、ここで問題にしたいのは、「とりたて詞」というカテゴリーの内部も均質ではないという点である。先に、格助詞との承接順に基づいたとりたて詞の区分を示したが、これは実際にいくつかの現象におけるとりたて詞間の振る舞いの差と重なる。以下、具体的な例を2つ見ていく。

1.2.1 (擬似) 分裂文における振る舞い

まず、ハ分裂文「A なのはB だ」とガ分裂文「A なのがB だ」の焦点位置

⁷ 北原保雄(1973:13)の「副助詞は、その下接した成分素材や成分に限定の概念を加えるのみで、それに新しい構文的職能を附加するようなものではない」という記述も、これと同一の方向にあるものと思われる。

⁸ このとりたて詞の「非名詞性」に対しては、これまで、その根拠となる連体修飾の可否を見る「連体テスト」の妥当性への疑問(宮地(1999))、名詞性に関する「連体テスト」の絶対的扱いへの疑問(木田(1998),丹羽(2001))が提示されている。この点については次の1.2.1 節で触れる。

(「B」の位置)におけるとりたて詞の振る舞いを見る。

熊本(1989)や砂川(1995)、Hasegawa(1997)等が指摘しているように、ハ分裂文の焦点位置には、名詞句だけでなく、格助詞を伴った名詞句 ((7a)) や遊離数量詞句 ((7b))、従属節 ((7c)) などさまざまな要素が現れる。

- (7) a. 太郎にぶつかったのはあの交差点だ。
 b. その時君に持ってきてもらったのは週刊誌を 3 冊だ。
 c. 僕が終電に間に合わなかったのは酔っていたからだ。

これに対して、ガ分裂文(8)では、このような要素は焦点になりえない。特に、(8a・b)の場合は、(9)との対照性から明らかなように、助詞の有無が問題となっている。このようなことから、砂川(1995:356)は、ガ分裂文の焦点位置に現れる要素は「「裸の」名詞句」であるとしている。

- (8) a. *太郎にぶつかったのがあの交差点だ。
 b. *その時君に持ってきてもらったのが週刊誌を 3 冊だ。
 c. *僕が終電に間に合わなかったのが酔っていたからだ。
- (9) a. 太郎にぶつかったのがあの交差点だ。
 b. その時君に持ってきてもらったのが週刊誌 3 冊だ。

以上のことを前提として、分裂文の焦点位置へのとりたて詞の分布を見てみる。まず、ハ分裂文では、Fタイプ「だけ」「ばかり」は焦点位置に現れるが、「まで」「さえ」及びKタイプのとりたて詞はこの位置に現れない。

- (10) a. 太郎が話したのは自分のこと {だけ/ばかり} だ。
 b. *太郎が話したのは自分のこと {まで/も} だ。
 c. *太郎が話さなかったのは自分のこと {しか/さえ} だ。

同様の分布の異なりは、名詞述語文(コピュラ文)でも観察される。

- (11) a. 合格者は有名校出身者 {だけ/ばかり} だ。
 b. *合格者は無名校出身者 {まで/も/さえ} だ。

近藤(1983)は「体言と助動詞「だ」との中間に入る」か否かを見るテストから、この位置への分布が可能な「だけ」「ばかり」に体言を形成する準体機能を認めている。しかし、既に「だけ」については熊本(1989)や Hasegawa(1997)等に指摘があるが、ガ分裂文の焦点位置には「だけ」「ばかり」を含め、いかなるとりたて詞も現われない⁹。

- (12) *太郎が話したのが自分のこと {だけ/ばかり} だ。

一方、近藤(1983)において「準体機能」のみを持つ「準体型」副助詞とされる、範囲の「まで」や例示の「など」を含む句は、問題なくこの位置に現れる。

- (13) a. 私が面接を担当したのが[1番の学生から8番の主婦まで]だ。
 b. 外国生活で恋しくなるのが[日本茶やカップラーメンなど]だ。

(13)の「まで」「など」を含む句は連体修飾を受けることもでき、沼田(1986)、沼田(2000)の基準ではとりたて詞の範囲から外れるが、これらの現象からは逆に、仮にとりたて詞「だけ」「ばかり」が準体機能を持つとしても、その体言相当のとりたて詞句は(13)の「まで」「など」を含む句とは性質の異なるもの(先の砂川(1995)の指摘に沿って言えば「裸の」名詞句ではないもの)になるということが指摘できる。

このようなガ分裂文における分布の制限を持つ句(遊離数量詞句やとりた

⁹ ただし、分裂文を理由節や条件節に埋め込んだ場合、「だけ」「ばかり」のこの位置への分布が許容される。

(i) 太郎が話したのが自分のことだけだったら、まだ笑い事で済んだだろう。しかし、これらの従属節中に「は」が現れにくいことを考慮すると、(12)と(i)の現象は分けて考える必要があると言える。

て詞句) は、いずれも連体修飾を受け得ない。ガ分裂文の焦点位置への分布と連体修飾の可否が共通の原則によって捉えられるものであるならば、問題が統語論的な範疇にあるのか、この位置の要素の指示性もしくは定性のような意味論的な特徴にあるのかは明確ではないが、どちらの方向をとるにせよ、とりたて詞に関してはこれまでの分析の再検討が必要になる。

すなわち、もし前者の範疇の問題であるならば「準体機能」の位置付けの再検討(その機能によって何が形成されるのかの明確化)が、後者の意味の問題であるならば、とりたて詞が名詞句に与える影響の検討(とりたて詞句全体の意味的特徴の明確化)が必要となる。後者の場合、沼田(1986)及び沼田(2000)におけるとりたて詞の「非名詞性」がより意味的な問題として捉え直される可能性がある¹⁰。

この名詞性の問題は、無論、名詞の持つ特徴を明らかにすることから議論を始める必要があるが、少なくとも、とりたて詞句の特徴はとりたてる名詞句の特徴や格助詞の前という分布位置から完全に予測されるものではない、ということは確認できる。

1.2.2 数量詞との共起

同様のことを、別の現象でも見てみる。

F タイプのとりたて詞「ばかり」は(14)のような形で(遊離)数量詞と共起するが、このとき数量詞が表す数量分の個体がすべて名詞句の指示する type に属するという全称表現的な解釈 (cf. 原田・本多(1998)) を受ける。

(14) a. 学生ばかり 3人が代表に選ばれた。

解釈：選ばれた代表 3 人は全員学生だった。

b. ケーキばかりを 3つ買った。

解釈：買ったもの 3 つは全部ケーキだった。

¹⁰ 熊本(1989:21)は、指定文としてのガ分裂文の特性から、焦点部は「すでに定まったものでなければならない」としている。また、木田(1998)は連体修飾を受けない名詞のタイプの一つとして量的な名詞を挙げている。城田(1987)は、格助詞の前の副助詞が体言ではあるが連体修飾を受け得ない「臨時的複合体言」を形成するとしているが、このような特徴のギャップもまた、名詞(句)のタイプを明確にする必要性を示している。

同じく F タイプの「だけ」の場合は 2 つの解釈が得られるが、文脈を整えれば「ばかり」と同様の解釈 ((15a)) が可能である。

(15) あまり甘くないケーキだけを3つ買った。

- a. 全部あまり甘くないケーキになるように 3 つ選んで買った。
- b. 3 つ買ったものは、あまり甘くないケーキだけだ (他のお菓子は 2 つずつ買った)。

(14) や (15a) のような解釈では、「だけ」「ばかり」がいわば数量の内訳がどのようであるかを述べており、「だけ」「ばかり」を数量詞の後に移動すると文意が変わってしまう。

一方、K タイプのとりたて詞や「まで」「さえ」の場合、このような数量の内訳に言及する解釈は得られない。「も」の場合は 2 つの解釈が可能であるが、これは「も」のフォーカスが数量詞を含む場合 ((16a)) と名詞句のみの場合 ((16b)) の違いによるものと考えられる。

(16) (クッキーだけでなく) ケーキも 3つ買った。

- a. (クッキーに加えて) 3 つのケーキを買った。
- b. (クッキーを 3 つ買い、) ケーキも 3 つ買った。

また、「まで」「さえ」「は」の場合は名詞句をフォーカスとした解釈が極めて強く、「しか」はこの解釈しか持たない。

(17) a. ケーキまで 3 つ買った。

解釈: 3 つ買ったものには、(予想外の) ケーキもあった。

b. ケーキしか 3 つ買わなかった。

解釈: 3 つ買ったものはケーキだけだ (他のお菓子は 2 つにした)。

構造的に見た場合、川添(1999)の「しか」による構成素テストから、「だけ」

「ばかり」については数量詞と同一の構造内にあることが確認される。

- (18) a. [ケーキばかりを 3 つ] しか買わなかった。
 b. [あまり甘くないケーキだけを 3 つ] しか買わなかった。

同様に、先行する不定名詞句がある(19)のような例¹¹についても、遊離数量詞と「だけ」「ばかり」については同一の構造内にあると言える。

- (19) a. おかしを[チョコレートばかり 3 つ] しか買わなかった。
 b. 刺身を[特にいいものだけ 2 パック] しか買わなかった。

これらのとりたて詞はまた、数量詞と共起することによって名詞句との等位接続構造にも現れる ((5)参照)。

- (20) [ビールばかり(を) 3 本]と[おでん]を注文した。

一方、「まで」「さえ」と K タイプのとりたて詞の場合は、とりたて詞相互の意味が矛盾するために「しか」によるテストの有効性が問題となるが、これらは名詞句との等位接続構造には現れないことが確認される。

- (21) *[ビールも 3 本]と[おでん]を注文した。

以上、1.2.1 節と 1.2.2 節で見た現象では、いずれも、「だけ」「ばかり」のグループと「まで」「さえ」「は」「も」「しか」のグループとが異なる振る舞

¹¹ とりたて詞「だけ」「ばかり」と先に見た範囲の「まで」句は、表面的には同様の形で数量詞と共起する (cf. 茂木(2000b))。

(i) a. [ステーキからケーキまで] 3.0 皿をべろりと平らげた。

b. 休憩を[3時から5時まで] 2時間もらった。

この「まで」の振る舞いは、とりたて詞「まで」とは異なるが、一方で F タイプのとりたて詞と共通性を持つと言える。このようなとりたて詞とその周辺要素との間の連続性のあり方の分析やとりたて詞の体系との関連付けは今後の課題として残る。

いを示した。区分としてまとめると、次のようになる。

(22) だけ・ばかり | まで・さえ・は・しか・も

次節では、この区分がとりたて詞のどのような特徴を反映したのものとして捉えられるのかという問題を考えていく。

2. とりたて詞の階層性と区分

本節では、上の(22)の区分の背景を、とりたて詞の「階層」性の議論と関連付けながら探る。まず、この「階層」と、とりたて詞に共通する特徴と考えられる「呼応」について概観する。

2.1 とりたて詞の「階層」

とりたて詞の体系とこれに含まれる語の個別的特徴の両面を視野に入れた分析では、例えば、個々の語が文の階層的構造にそれぞれどのように位置付けられ、またそれらの全体像がどのような姿(階層)になっているのかといった点を見ることになる。このような視点からの研究には沼田(1989)や野田(1995)があるが、とりたて詞が文の階層構造と並行的に「だけ」を最も内側(下側)とした階層を形作るという分析結果では概ね一致する。

茂木(2000a)では、このとりたて詞の階層をさらに精密なものにするために、複数のテストに基づき、5つのとりたて詞(「だけ」「まで」「は」「さえ」「も」)の分析を行った。

一例として、補助動詞のスコープテストを挙げる。次の(23a)のような「過ぎる」複合動詞文において、とりたて詞がヲ格目的語をとりたてる場合、表面上のとりたて詞の位置は一律に(23b)の T の位置に想定できるが、実際の文の意味解釈から判断されるとりたて詞の位置には異なりが生じる。

(23) a. ケーキを食べ過ぎた。

b. [IP ... [VP₁ [VP₂ ケーキ T (を) 食べ] 過ぎ] た] ※T: とりたて詞

例えば、(23b)の T が「だけ」である場合、(24)のように「だけ」は補助動詞「過ぎる」のスコープに意味解釈上含まれることから、この時点での「だけ」の位置は T 位置を含む動詞句 VP₂ のレベルに想定される。

(24) [VP₂ ケーキだけ(を)食べ]過ぎた。

解釈：「(他のものは食わず) ケーキのみを食べる」ことをし過ぎた。

一方、それ以外のとりたて詞（「まで」「は」「も」「さえ」）では、例えば(25)のように、補助動詞のスコープに含まれる解釈が得られないため、これらのとりたて詞は、表面的な T 位置から VP₂ 以上のいずれかの構造レベルに「繰り上げ」られる性質を持つと考えた。

(25) [VP₂ ケーキ {??まで/*さえ} 食べ]過ぎた。

解釈：「(他のものでは足らず) ケーキにも手を出す」ことをし過ぎた。

このような分析は、とりたて詞は基本的に何らかの述部要素と関係を結ぶ（「呼応」する）という特徴を有するという仮定に基づいている。とりたて詞の中には、この呼応が、「しか」と否定を表す述部要素、例示の「でも」（例：「お茶でも飲もう」）と文末のモダリティ要素のように必須的な共起関係として捉えられるものもあるが、これらのように形式的に明示されない場合にも、何らかの形でとりたて詞と述部要素とが関係を結ぶメカニズムが存在すると考える¹²。このような観点から言えば、(24)(25)のテストは、例えば「だけ」は VP₂ 内の、「さえ」は VP₂ より上のレベルの要素と呼応することを示すものであると言える。

このテストをさらに「ばかり」にも適用した場合、「だけ」と同様の特徴を示すことから、「ばかり」は「だけ」と同じもしくはこれに近い階層にあるとりたて詞と言える。

¹² とりたて詞の「呼応」の問題は、既に、記述的研究では野田(1995)等、理論的研究では長谷川(1995), Aoyagi(1999), 佐野(2001)等において議論がなされている。

(26) 【VP₂ ケーキばかり(を)食べ】過ぎた。

解釈：「(他のものはほとんど食わず) ケーキばかりを食べる」ことをし過ぎた。

さらに、(23b)の動詞句 VP₁ のレベルに関して、茂木(2000a)では(27)のような VP 焦点化テストにおいて「だけ」「まで」が動詞句内に現れる(動詞連用形に後接するとりたて詞のスコープに意味解釈上収まる)ことを指摘したが、「ばかり」についても同様の結果になる。

(27) 【VP 太郎 {だけ/ばかり/まで} を誘い】はしなかった。

また、次の(28)は、Yanagida(1996)が「さえ」「しか」「は」に指摘する様態副詞との相対的な語順の制限である(「は」については Miyagawa(1997)にも指摘がある)。これらのとりたて詞句が様態副詞の後に現れる語順が許されないのに対し、Sano(2001)が指摘する「だけ」「まで」、さらに「ばかり」のような(27)の環境に現れるとりたて詞句はこの語順でも問題がない。

(28) a.*ジョンははやくその手紙さえ読まなかった。(Yanagida(1996:26))

b. 【VP 素早く、VP 売れ筋商品 {だけ/ばかり/まで} を選ん】だ。

様態副詞が動詞句を修飾すると考えた場合、(27)と同様、(28b)の現象は、「だけ」「ばかり」「まで」が動詞句内のいずれかの要素と呼応することを示していると言える。

以上の現象から、「だけ」「ばかり」は VP₁、「まで」は VP₂ のレベルの要素と呼応すると考えられるが、まとめると、とりたて詞の体系の内部には動詞句を境界にした次のような「階層」が設定できることになる。

(29) だけ・ばかり | まで | は・さえ・も…

この(29)の階層は、「まで」「さえ」の扱いを保留すれば、格助詞との承接順による F/K タイプの区分や、前節の(22)の区分と矛盾しないことが指摘できる。

2.2 とりたて詞の階層と区分

以上のことを考え合わせると、F タイプのとりたて詞は、(29)のようにとりたて詞の階層では下位にあり、動詞句内の要素と呼応するという特徴を持つと言えるが、さらに、このような呼応が想定しにくい環境にも現れるという点が指摘できる。

先に 1.2.2 節で用いた川添(1999)の「しか」によるテストを考える。

(30) [XP おかしばかりを 3つ]しか買わなかった。

このとき「だけ」「ばかり」を伴う名詞句は、数量詞と同様に「しか」によってとりたてられた構造の中にある。通常、とりたて詞は、それを含む構造全体をとりたてる他のとりたて詞を越えてスコープをとることはない(その構造が「島(island)」になる(佐野(1997),佐野(2001)))とされる。このため、「しか」がとりたてる構造(XP)内にある(30)の「だけ」「ばかり」は、「しか」を越えて述部と直接的な関係を持つことはないと言える(このことは、(19)のようにとりたて詞句が遊離数量詞の位置に現れる場合も同様である)。

とりたて詞「だけ」「ばかり」が(20) (名詞句との等位接続構造) や(30)のような数量詞との共起構造、あるいはハ分裂文の焦点位置(1.2.1 節)に現れるということは、これらが、文の述部から切り離された(述部要素との呼応が直接的に成立しない)位置に現れることが許されるタイプのとりたて詞であるということを示している(cf.佐野(1998))。

このときの「だけ」「ばかり」の呼応の相手は問題として残るが、少なくとも、これらの構造に現れえない(29)の階層の「まで」以降のとりたて詞は、このような呼応の可能性を持たないと言える。ここで、この呼応のバリエーションという観点から、先の(22)のとりたて詞の区分を捉え直してみると、このような呼応の可能性によって上で挙げた構造への生起が許されるという特徴を<名詞句とりたて>と呼ぶならば、従来の承接関係だけでなく、当該

のとりたて詞の現れうる環境という基準に基づき、「だけ」「ばかり」をく名詞句・文とりたて>のとりたて詞と呼べる（と同時に、必ず文の述部要素と呼応する「まで」以降のとりたて詞はそのように呼べない）ことになる。

このように、とりたて詞の区分の問題を「とりたて詞」というカテゴリーに内在する呼応の選択の幅の違いとして捉えた場合、この区分自体はとりたて詞全体に共通性を認めることと必ずしも矛盾しない。

ただし、この区分のあり方は（基本的な部分では同一の方向にあっても）一様ではない。例えば、格助詞との承接関係に基づいた F タイプと K タイプのとりたて詞の間のグレーゾーンには「まで」「さえ」があるが、(22)の区分ではこれらが同じグループに入れられ、(29)の階層では別のグループに分けられた。このような区分の「ゆれ」は、「とりたて詞」にいかなる特徴（の束）を認めるべきかという根本的な問題を提起するが、これは、とりたて詞以外の要素（例えば、先に見た数量詞）との関連を含め、さらに多様な現象から検討すべきものであると言える。最後に、今後の課題を提示する意味も含め、このことを示す現象を観察する。

2.3 疑問文における振る舞い

長谷川(1995)や Yanagida(1996)は、「も」「しか」(Yanagida(1996)ではさらに「さえ」)を伴う名詞句と「何」のような wh 要素を含む句の語順に関して、「wh 句-とりたて詞句」の語順では問題がないのに対し、「とりたて詞句-wh 句」の語順では文の許容度が低くなるという現象について論じている ((31)-(32)の判断は Yanagida(1996)による¹³)。

- (31) a. ジョンは何をメアリにさえ送ったの?
 b. ジョンは何をメアリにも送ったの?
 c. ジョンは何をメアリにしか送らなかったの? (Yanagida(1996:30))
- (32) a.*ジョンはメアリにさえ何を送ったの?

¹³ 「さえ」はそもそも疑問文になじみにくいいため、他のとりたて詞の例と比べて許容度が相対的に低いと感ぜられるかもしれない。

b.?*ジョンはメアリにも何を送ったの?

c.?*ジョンはメアリにしか何を送らなかったの? (同上)

しかし、とりたて詞の中でも、「だけ」「ばかり」「まで」には(格助詞との承接順に関係なく)このような問題が見られない¹⁴。次の(33)は、話者が「ジョンがメアリに対して何かを送った」ことを知っている文脈において問題なく許容される。

- (33) a. ジョンはメアリにだけ何を送ったの?
 b. ジョンはメアリにばかり何を送ったの?
 c. ジョンはメアリにまで何を送ったの?

同様の対照性は、「なぜ」「どうやって」等との間にも見られる。

- (34) a. 君 {だけ/ばかり/まで} なぜレポートを出したの?
 b. ??君 しか なぜレポートを出さなかったの?
 c. *君 も なぜレポートを出したの?¹⁵
- (35) a. なぜ君 {だけ/ばかり/まで} レポートを出したの?
 b. なぜ君 しか レポートを出さなかったの?
 c. なぜ君 も レポートを出したの?

¹⁴ Yanagida(1996)は、とりたて詞を伴う複合名詞句における wh 句の生起と、格マーカ―(「が」)や他のとりたて詞との承接関係から、とりたて詞が「だけ」「まで」のグループと「も」「しか」「は」のグループに分けられ、これらが名詞句内で占める構造的位置が異なるとしている。また、後者のグループのとりたて詞によって焦点化された句は、動詞句の上の焦点位置 (FocP の指定部) への移動が仮定されている(前者のグループに関しては言及がない)。これらの分析及びそこから生じる範疇の問題の位置付けについては、現段階では検討の用意がない。とりたて詞の承接関係のゆれ、呼応の多様性を考慮に入れながら、さらに分析を進めたい。

¹⁵ (34c)の「も」が「柔らげ」の「も」(cf. 沼田(1986), 沼田(2000))として解釈される場合は問題がない。いわゆる主題の「は」についても同様のことが言えることから、この現象は野田(1995)や三井(2001)のこの「も」の位置付けに一致すると言える。

ここでは現象を示すに止まるが、これらの現象は、「だけ」「ばかり」「まで」対「は」「も」「しか」「さえ」という区分に反映されるとりたて詞の特徴を、さらに wh 要素との関係を捉えられる形で考えていく必要があることを示している¹⁶。このとき、このような現象が「さえ」や K タイプのとりたて詞と wh 要素とが共通して持つ特徴に起因すると考えるのであれば、F タイプのとりたて詞や「まで」はこのような特徴を持たないという分析を行うことになる¹⁷。

3. おわりに

本稿でここまで示してきたように、とりたて詞の区分は、従来中心的に扱われてきた承接順を含めたさまざまな現象から、いくつかの形で設けられるものである。ただし、これらの区分の相互の関係は、決定的な矛盾を含んだものではない。このことは、とりたて詞間の振る舞いの異なりが、とりたて詞の階層や承接関係を含む、さらに大きな一貫した原理に基づいて分析できる可能性を示唆している。

これまでの研究は、分析の方法論や立場の違いはあれ、このようなとりたて詞の多様性と体系性という二面性をどのように扱うかという問題と常に向き合ってきたと言える。その点において、本稿は新たな問題提起を行うもの

¹⁶ 「だけ」「まで」「ばかり」に共通する別の現象として、否定文や可能文の解釈における格の影響が挙げられる。これらのとりたて詞は基本的に否定や可能のスコープに含まれるが、顕在的なガ格を伴う場合は必ず否定辞や可能要素よりも広いスコープをとる解釈になる(状態性述部との呼応を許容しない「ばかり」の場合は文の許容度が低くなる)。

(i) 太郎だけが本を買わない。(ONLY>NEG,*NEG>ONLY) (cf. Homma(1989))

(ii) 太郎が右目だけがつむれる。(ONLY>CAN,*CAN>ONLY) (cf. Tada(1992))

この振る舞いは数量詞と共通するものであることから、この現象に関わるとりたて詞の特徴もまた数量詞との関係を考慮しながら検討していく必要がある。

¹⁷ ここで見た現象を含めたとりたて詞と wh 要素の相互干渉の問題に対する具体的な分析は、長谷川(1995)、Yanagida(1996)、佐野(2001)等を参照。

ではない。

しかし、いかなる立場に立つにせよ、この問題を単なる「分類」の議論に終わらせないためには、当該の区分にとりたて詞のいかなる特徴がどのような形で反映されているのかについての明示的な議論を可能にする現象の観察・記述を、十分に積み重ねていかななくてはならない。このとき、とりたて詞の枠を越えた他の要素（特に数量詞や wh 要素、とりたて詞の同形態要素）との関係も視野に入れる必要があると言える。

本稿ではこれらの問題の一端を扱うに止まったが、今後の記述の体系化につなげていきたい。

【参考文献】

- 安部朋世 (1996) 「ダケによる<限定>と数量詞による<修飾>」『筑波日本語研究』1, pp.4-20, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 江口 正 (2000) 「「ほか」の2用法について」『紀要(言語・文学編)』32, pp.291-310, 愛知県立大学外国語学部
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」『日本語教育』14, 日本語教育学会 (奥津敬一郎 (1996) 『拾遺 日本文法論』ひつじ書房, pp.49-69 に再録)
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックス<日本語の変形をめぐる論議への一資料>」『言語』6-9, pp.83-91, 大修館書店
- 川添 愛 (1999) 「日本語遊離数量詞と量化—後置存在量化詞と副詞的量化詞—」『九大言語学研究室報告』20, pp.1-28, 九州大学文学部言語学研究室
- 木田敦子 (1998) 「係助詞と副助詞」『東京女子大学日本文学』89, pp.69-84, 東京女子大学学会日本文学部会
- 北原博雄 (2001) 「いわゆる遊離数量詞の文法」『国文学 解釈と教材の研究』46-2, pp.127-130, 学燈社
- 北原保雄 (1973) 「補充成分と連用修飾成分—渡辺実氏の連用成分についての再

- 検討一」『国語学』95, pp.1-19, 国語学会
- 熊本千明(1989)「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』17, pp.11-34, 佐賀大学教養部英語教室
- 近藤泰弘(1983)「副助詞の体系—現代日本語—」『日本女子大学紀要』32, pp.27-38
- 近藤泰弘(1995)「中古語の副助詞の階層性について—現代語と比較して—」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』pp.261-275, くろしお出版
- 佐野真樹(1997)「副助詞ダケの LF 移動におけるターゲットについて」『立命館文学』551, pp.152-188, 立命館大学人文学会
- 佐野真樹(1998)「名詞句の中に現れるダケとその作用域について」『立命館言語文化研究』10-3, pp.1-21, 立命館大学国際言語文化研究所
- 佐野真樹(2001)「日本語のとりたて詞の素性移動分析と Minimality 効果」『日本英語学会第 18 回大会研究発表論文集 (JELS 18)』pp.181-190
- 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 澤田美恵子(2000)「「とりたて」という概念の創出」『日本語学』19-5, pp.110-119, 明治書院
- 城田 俊(1987)「副助詞について」『国語国文』56-3, pp.32-45, 京都大学文学部国語学国文学研究室
- 砂川有里子(1995)「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄(編)『複文の研究(下)』pp.353-388, くろしお出版
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 Ⅲ』くろしお出版
- 丹羽哲也(1992)「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13, pp.93-128, 大阪市立大学文学部
- 丹羽哲也(2001)「「取り立て」の範囲」『国文学 解釈と教材の研究』46-2, pp.36-43, 学燈社
- 沼田善子(1986)「(第 2 章) とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわ

- ゆる日本語助詞の研究』 pp.105-225, 凡人社
- 沼田善子 (1989) 「とりたて詞とムード」 仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』 pp.159-192, くろしお出版
- 沼田善子 (2000) 「(第 3 章) とりたて」 金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 pp.153-216, 岩波書店
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』 pp.1-35, くろしお出版
- 長谷川信子 (1995) 「Wh-疑問文、否定対極表現の「しか」、と also の「も」」『第 3 回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム報告書』 pp.107-129, 南山大学
- 原田康也・本多久美子 (1998) 「量・程度・限度－「ばかり」の意味解釈を中心にして－」『言語処理学会第 4 回年次大会発表論文集』 pp.434-437.
- 三井正孝 (2001) 「モノ<提題>性－現代日本語の場合－」『日本語と日本文学』 32, pp.65-79, 筑波大学国語国文学会
- 宮地朝子 (1999) 「「とりたて」形式の構文的特徴と意味機能－とりたて詞と係助詞・副助詞－」名古屋・ことばのつどい編集委員会(編)『日本語論究 6 語彙と意味』 pp.51-87, 和泉書院
- 茂木俊伸 (1999) 「とりたて詞「まで」「さえ」について－否定との関わりから－」『日本語と日本文学』 28, pp.(左)27-36, 筑波大学国語国文学会
- 茂木俊伸 (2000a) 「とりたて詞の階層性について－動詞句及びスコープを手がかりとして－」『国語学会 2000 年度秋季大会要旨集』 pp.54-61.
- 茂木俊伸 (2000b) 「順序助詞句「A から B まで」について」『筑波応用言語学研究』 7, pp.29-42, 筑波大学文芸・言語研究科応用言語学コース
- 森重 敏 (1954) 「内属判断としての副助詞」『国語国文』 23-7, pp.1-12, 京都大学国文学会
- Aoyagi, Hiroshi (1994) On Association with Focus and Scope of Focus Particles in Japanese. In Hiroaki Ura and Masatoshi Koizumi(eds.)

- MIT Working Papers in Linguistics 24: Formal Approaches to Japanese Linguistics 1*. pp.23-24. MITWPL.
- Aoyagi, Hiroshi (1999) On Association of Quantifier-like Particles with Focus in Japanese. In Masatake Muraki and Enoch Iwamoto(eds.) *Linguistics: In Search of the Human Mind*. pp.24-56. Kaitakusha.
- Hasegawa, Nobuko (1997) A Copula-based Analysis of Japanese Clefts: *Wa*-Cleft and *Ga*-Cleft. In Kazuko Inoue(ed.) *Grant-in-aid for COE Research Report (1): Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*. pp.15-38. Kanda University of International Studies.
- Homma, Shinsuke (1989) The Scope of Negation and INFL-Movement in English and Japanese. *Tsukuba English Studies* 8. pp.85-102. Tsukuba English Linguistic Society, University of Tsukuba.
- Ishii, Yasuo (1999) A Note on Floating Quantifiers in Japanese. In Masatake Muraki and Enoch Iwamoto(eds.) *Linguistics: In Search of the Human Mind*. pp.236-267. Kaitakusha.
- Miyagawa, Shigeru (1997) Against Optional Scrambling. *Linguistic Inquiry* 28:1. pp.1-25.
- Sano, Masaki (2001) On the Scope of Some Focus Particles and Their Interaction with Causatives, Adverbs, and Subjects in Japanese. *English Linguistics* 18:1. pp.1-31.
- Tada, Hiroaki (1992) Nominative Objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14. pp.91-108.
- Yanagida, Yuko (1996) Syntactic QR in *wh-in-situ* languages. *Lingua* 99:1. pp.21-36.

【付記】

本稿は、筑波大学国語国文学会第 25 回大会（2001 年 9 月 29 日）における口頭発表「とりたてて詞と数量詞」の内容の一部に加筆したものである。発表の前後のさまざまな機会に有益なコメントを下された方々に感謝申し上げる。

On the Classification of Focus Particles in Japanese

Toshinobu MOGI

The aim of this paper is to discuss the problem of classification of focus particles in modern Japanese. In most studies, classification has been based on the relative order of case particles and focus particles. This paper arrives at the same classification from observation of the behavior of each focus particle in the (pseudo-)cleft construction and the quantifier floating construction. This paper also considers the problem of the “nouniness” of focus particles as compared to the case of numeral quantifiers and shows that focus particle phrases have features which distinguish them from standard noun phrases. Finally, this paper suggests that the classification of focus particles reflects the variation in their individual properties of agreement with predicates.